



リュックのなかの手帖 : 越北した言語学者・金壽 卿の朝鮮戦争と離散家族

著者	板垣 竜太
雑誌名	同志社コリア研究叢書
巻	3
ページ	98-141
発行年	2017-03-24
権利	同志社コリア研究センター
URL	http://doi.org/10.14988/re.2017.0000016103

3 リュックのなかの手帖

—越北した言語学者・金壽卿の朝鮮戦争と離散家族—

いた がき りゆう た
板 垣 竜 太

はじめに

ここに、ある人物が書いた朝鮮戦争の回顧録の写しがある。その表紙には3つの題目がハングルで並んでいる。上から、「ただ一心党に従って南北7千里〔朝鮮の1里は約400m〕」、「リュックのなかの手帖を開いて」、「一知識人の祖国解放戦争参戦手記（1950. 8. 9～1951. 3. 3）」とある¹。その著者名はハングルで「キム スギョン 김수경」と記されている。キム スギョン 金壽卿は1918年に日本の植民地下の朝鮮で生まれ、2000年に朝鮮民主主義人民共和国の平壤で亡くなった言語学者である。彼は、越北した1946年から1960年代にいたるまで、北朝鮮の言語学界において中心的な役割を果たした人物の1人である²。この

* 本稿は次のような段階を経てきた。まず私は2015年11月、*Cross-Currents* という雑誌の特集用に、英語版の原稿を書き上げ投稿した。同稿は査読のうえ、2016年3月までに掲載が確定したもの、他の特集筆者の原稿が遅れに遅れたため、2017年2月現在にいたってもまだ掲載にいたっていない。一方、私は2016年3月5日に開催したシンポジウム向けに、さらに多くを書き加えて報告した。ただ、その原稿があまりに長大なものであったため、本書収録のために一部を削除したうえで、全体を整え直した。

¹ 朝鮮語で記せば、「오직 한마음 당을 따라 북남 7천리」「배낭속의 수첩을 펼쳐며」「한지 식인의 조국해방전쟁참전수기（1950. 8. 9～1951. 3. 3）」となる。

² 金壽卿は、2009年に崔昇鳳によってはじめて本格的に論じられた言語学者である（崔경봉 「金壽卿의 국어학 연구와 그 의의」『한국어학』45, 2009）。その後、崔昇鳳も交えて、より総合的に金壽卿の言語学を論じた論文集が板垣竜太・コヨンジン編『北に渡った言語学者金壽卿の再照明』（同志社コリア研究センター、2015年）である。

手記は、朝鮮戦争の真っ只中で彼がリュックのなかの手帖に記録しつづけたシンプルな日記をもとに、1990年代になって彼自身が主に家族を読者として想定して書き下ろしたものである。この回顧録の写しは、現在トロントに住む彼の子の家で保管されている。朝鮮戦争の勃発にはじまり、この手記が平壤で書かれ、トロントの離散家族の手元に届くまでの過程それ自体が、冷戦下の朝鮮半島における南北分断状況の厳しい現実を物語っている。本稿は、金壽卿が日記をもとに書いた回顧録および家族宛の書簡という個人記録から読み取り得る彼の朝鮮戦争と家族の離散に関する経験を通じて、北朝鮮の言語学史の裏面を明らかにすることを試みる。

朝鮮戦争は数多くの離散家族をもたらした。金壽卿もまたこの戦争の過程で、妻・李南載^{イナムジェ}や4人の子らと離ればなれになってしまった。のちに詳しく述べるように、この回顧録が仕上げられたのは、休戦から40年以上経った1994年のことであった。彼は、あたかも家族とのあいだを隔てた時間と空間を埋めるかのように、200字詰め原稿用紙換算で600枚にわたって、離散の原点となった朝鮮戦争の経験を朝鮮語で書き連ねた。すなわち、朝鮮戦争が家族の離散を生み出し、その離散が朝鮮戦争の回顧録を生み出したのである。

ここで注目しておくべきなのは、朝鮮戦争が、金壽卿にとって家族離散のはじまりであったとともに、北朝鮮の言語学理論においても大きな転換点だったことである。1950年6月20日、戦争が勃発するちょうど5日前、ソ連の最高指導者ヨシフ・スターリンが、ソ連共産党の機関紙『プラウダ』に「言語学におけるマルクス主義について」という論文を掲載した³。こ

³ スターリン言語学論文については、さしあたり田中克彦『「スターリン言語学」精読』（岩波現代文庫、2000年）を参照せよ。なお、スターリンの論文を含めた一連の論争に関わる記事は、発表から間もなくロックフェラー財団の援助を受けたコロンビア大学スラヴ言語学科によって編纂および翻訳されており、英語で読むことができる（John V. Murra et al. eds. and trans., *The Soviet Linguistic Controversy*, New York: King's Crown Press, 1951）。

それは、それまでソ連の言語学において主流を成していたニコライ・マルとその学派の学説を根底から批判し、新たな枠組を提示するような論文であった。その一つの主要な論点とは、マルが言語を階級的な性格をもつものであり、したがって史的唯物論でいう上部構造に位置するものだと規定したのに対し、スターリンは「民族語が階級的なものではなく、全人民的言語であり、民族の成員にとって共通な、民族にとって単一のものである」とした点にある⁴。多大な影響力をもつ国家指導者が、言語政策についてというよりは、一学問分野である言語学について論文を公表するというのは極めて異例なことである。そのこともあって、スターリン論文は、社会主義圏を中心として学問領域に大きなインパクトを及ぼした。既に私が別の論文で詳細に論じたように、金壽卿は、まさにこのスターリン論文とその後のソ連言語学の変動を北朝鮮へと紹介するとともに、それにもとづいて朝鮮語学のあり方に関する新たなプログラムを提示した中心人物であった。その際、スターリン論文から金壽卿が取り出した論点の中心は、言語が「民族的自主性」の基礎にあるという思想であった⁵。忘れてはならないのは、この作業がおこなわれたのが、他ならぬ朝鮮戦争の真っ最中だったということである。

朝鮮戦争下で進められた言語学の再編と、金壽卿にとってのパーソナルな戦争体験。前者に関わる彼のテキストが、同胞どうしの殺し合う深刻な状況のなかで、民族の統合という至上命題のもとで書かれたとすれば、後者は家族の離散という状況において記された。その両者をつなげて考えることは容易なことではないが、本稿はそれを部分的ながら試みてみたい。

この手記には、金壽卿の体験だけではなく、彼以外のことに関連しても

⁴ 田中克彦、前掲書、194頁の訳文による。

⁵ 이타가키 류타 (板垣竜太) 「월북학자 김수경 언어학의 국제성과 민족성」 신주백 편 『한국 근현대 인문학의 제도화: 1910~1959』 해안, 2014.

貴重な情報を数多く含んでいる。そのため、本来であれば手記全体を公開した方がよいのであろう。ただ、遺族はまだ回顧録そのものを公開することには躊躇を覚えている。これが基本的には家族に向けて書かれた私的な文書であること、にもかかわらずそのテキストは家族が知る金壽卿とは異質なものを感じずる文体や内容であること、その公開が南北に離散する家族に何らかの悪影響を及ぼすのではないかという懸念を払拭しきれないこと、などがその理由である。南北分断のもたらす緊張が緩和されない状況において、そのように遺族が判断することは十分理解できる。そこで本稿では、可能な範囲においてこの回顧録の内容を紹介しながら、金壽卿にとっての朝鮮戦争と家族離散の経験を描き出す⁶。

回顧録はそれが書かれた時代の状況と関係性の影響を強く被るため、それを単純に朝鮮戦争の経験を記した一次資料だと言い切るわけにはいかない。しかし、一方でこの手記は、本当にそのことを経験しなければ書けないであろう事実が書き込まれており、全体的に信憑性は高い。そこで、本稿は次のように手順で論述を進める。まずこの「リュックのなかの手帖を開いて」というテキストの成立過程を明らかにする(1)。その成立過程を外しては、この手記の存在理由を理解できないからであるし、またそのメイキングの過程自体が家族離散の歴史を物語っているからである。次に手記に書かれた朝鮮戦争下の金壽卿の〈歩み〉——文字どおり歩いた道のりでもある——の概要を把握する(2)。そのうえで、本稿では金壽卿自身の朝鮮語文体論の枠組を援用しながら、この手記に刻まれた「個人的」なものとして「社会的」なものについて考察する(3)。「2」での手記の読み方が、その内容を1950-51年の歴史的な経験に関する記録として検討するものだ

⁶ シンポジウムの報告文では、「戦場で出会った知識人たち」という1節を加え、手記に登場する知識人の動向について紹介と検討をおこなっていた。本稿では紙幅の都合上その部分を割愛した。

とすれば、「3」でのそれは、一種の再帰的な観点から手記をテキストとして分析する試みとなる。

1. テキストの成立過程：家族離散の原点を回想する

まず、金壽卿がいかにして朝鮮戦争の回顧録を書くにいたったのか、それがどのようにトロントの家族に渡ったのかを見ておこう。これは単純に資料の解題ではなく、それ自体が冷戦下の離散家族の歴史を物語るものである⁷。

朝鮮戦争が勃発した当時、金壽卿は金日成^{キムイルソン}総合大学の副教授で朝鮮語学講座長を務めており、妻・李南載と4人の子、母、妹とともに同大学の官舎に住んでいた。植民地期から、その類いまれな語学能力によって世界の言語学を原典で読みこなししていた彼は、1946年に越北して金日成大学の教員となり、政府（初期には北朝鮮（臨時）人民委員会教育局、1948年からは朝鮮民主主義人民共和国教育省）が1947年に組織した朝鮮語文研究会を拠点として、朝鮮語の正書法や規範文法の確立において中心的な役割を果たしていた⁸。そこに1950年6月25日、朝鮮戦争が勃発した。戦争初期、北朝鮮の人民軍側は破竹の勢いで南朝鮮を占領していった。金日成大の教員たちは、南側の「解放地区」において政治講習などの朝鮮労働党の事業に携わるべく、8月9日、南に向けて派遣された⁹（回顧録10頁。以下、回顧録から引用する場合は、原テキストのページ数を[10]のように括弧で表す）。彼は、平壤を発つとき、「戦

⁷ 以下の家族離散に関する事実関係は、主にトロントに住む金壽卿の妻子の証言および彼の回顧録にもとづいて再構成した。

⁸ 植民地期から朝鮮戦争勃発前までの金壽卿については、拙稿「金壽卿の言語研究と日本：植民地、解放、越北」（板垣竜太・コヨンジン、前掲書）に詳細に記したので、参照されたい。

⁹ この事実は金日成総合大学10年史によっても確認される（『김일성종합대학 10년사』김일성종합대학, 1956, 74쪽）。

争が長く続くものとは予見し得なかった」という [5]。実際、これを最後に家族と離ればなれになってしまうとは、彼はその時点で思ってもみないことであった。

彼はようやく9月になって、遠く南方の^{チンド}珍島まで派遣された。彼はそこで、審査を受けて朝鮮労働党员や候補党员として登録された人々に対し、1度に50人ずつ5日間にわたる政治講習をおこなう任務を受け持つことになった [23-24]。しかしながら、米軍を主力とする国連軍の^{インチョン}仁川上陸 (9月15日) を契機に、既に戦局は逆転していた。3期分の講習を終えて間もなく、金壽卿は自力で平壤へ後退するよう指示された。

その後退の途中に彼は、日記までは書けないにしても、通過地点を記録することぐらいはしなければならぬと思いはじめた。しかし、すぐに筆記用具も紙も手に入らなかったため、まずは平壤を出発してからの日付と通過地点を全て思い出し、それからは朝出発した地点、夜に到着した地点を記憶しておくことにした。するとある日、ある農家で小さな手帖1冊と鉛筆の切れ端を手に入れることができた。その場で、記憶しておいた日付と地名を全て書き付けたうえで、その翌日からリュックに入れたその手帖に日々の記録 (主として出発、通過、到着の地名) を残すことにしたのである。

そして紆余曲折の末、彼が平壤にようやくたどり着いたのは1951年3月3日のことであった。ところが、既にそこに家族はおらず、すれ違いで南に行ってしまった。これについては後で述べよう。

彼には、家族と別れてしまったことを悲しむ余裕も与えられていなかった。すぐに金日成総合大学での教育研究の仕事が待っていたのである。当時、金日成大のキャンパスは一時的に平壤を離れ、^{ビョンアンナムドチュンファナムゴッ}平安南道中和郡南串面に移っていた¹⁰。彼は大学の近くにあった市場で1冊のノートを入手した。その前半には、その頃彼が学習していた言語学理論の図書を抜粋したりし

¹⁰ 前掲『김일성종합대학 10년사』80쪽.

ていた。1952年前半に金壽卿がスターリン論文に関して集中的に文章を発表していたことを考えれば、おそらくこのときノートに書き記していた言語学理論とはそれに関連したものであったものと考えられる。そしてノートの後半には、戦場から持ち帰った手帖の中身を書き写した。そこには1950年8月9日から翌年3月3日までの約7ヶ月間、38度線を行き来しながら7,000里、すなわち約2,800km 歩いた日付と地点が10頁にわたって記されていた（本稿末尾の資料を参照）。ほとんどはそれだけの記録だが、ところどころに「泰成の1歳記念日」「南載の誕生日」「^{ヘジヤ}惠慈の誕生日」「^{ヘヨソ}惠英の誕生日」などと、妻や子どもらの誕生日だけはしっかりと書き記されていた。彼は後にこのノートの部分に、「祖国の統一・独立のために：祖国解放戦争期に私が歩いた道」という題目を付けた。

彼はその後、このノートを時おり取り出しては、戦争の日々を思い出していたという〔6〕。しかし、彼がその経験を語る場を持ってはいたわけではなかった¹¹。彼は、1953年頃、金日成大を卒業した女性と再婚した。後にトロントの妻に送った手紙では、その理由について「ひとり残った私としては、仕事をするためには生活上の補助者が必要」だったからだと説明している¹²。それに加え、肉親が南にいる場合、新たに北で家庭を築かないと、その立場に疑いをもたれる可能性があるという事情もあっただろう

¹¹ 朝鮮戦争の休戦協定に「失郷私民 (displaced civilian)」に関する項目が規定されており（第3条59項）、その条文だけ見れば、戦争によって南から北へ、または北から南へ移動することになった者のうち、「帰郷することを望む」者は帰ることができるよう定めた。しかしながら、南でも北でもこの範疇に入れられたのは、意思に反して連れ去れた人々であったし（ただし現実には送還されることはなかった）、どのような境遇の人が「離散家族」とみなされるかは、南北間関係や社会の状況を反映しながら変化してきた（김귀옥『이산 가족, '반공 전사' 도 '빨갱이' 도 아닌』역사비평사, 2004, 第2,4章）。その点からすると、1946年に「自ら」越北した金壽卿、そして1950年に少なくとも「連行」された人ではなかった李南載とその家族は、それぞれ南と北の社会のなかで、長いあいだ離散家族としての経験を公に語る場がなかったといえよう。

¹² 1986年1月15日付、金壽卿→李南載書簡。

と思われる。ともあれ、彼は朝鮮戦争の経験をおりに触れて想起しながらも、それを胸に秘めて生きていた。

それから30年以上もの時が過ぎた1985年11月末、とつぜん金壽卿の手元にトロントに住む妻から1通の手紙が届いた [149]。李南載は、同年、中国の延辺大学からトロントに講演に来ていた歴史学者・高永一^{コヨンイル}に夫への手紙を託していたのであった¹³。それからは、郵便事情の関係で時間はかかったし北朝鮮当局の検閲を通らなければならなかったものの、金壽卿と妻や子とのあいだで直接の文通が可能になった。



1986年の手紙に同封されていた金壽卿の写真

こうして1988年8月、ついに娘の金恵英と金壽卿の再会が北京で果たされた。2人は北京大学で開催された第2次朝鮮学学術討論会に示し合わせて

¹³ 金恵英・金泰成「父、金壽卿」、板垣竜太・コヨンジン、前掲書、19頁。

参加したのであった。大会期間中、主催者側の配慮で金壽卿はホテルのシングルルームに泊まった。学会後の夕食が終わると、毎晩、2人はホテルの部屋で語り合った。部屋に入ると、金壽卿は「さあ、また戦争日記を続けよう」と言いながら、朝鮮戦争のときの話をしきりにしたがったという¹⁴。再会した娘に対し、2人だけの空間で、別れのはじまりとなった朝鮮戦争の経験を語る。ここに、彼の回顧録の原型があったといえよう。

この頃は、金壽卿にとって研究者として復帰しはじめた時期であった。1968年に金日成大学の教員から国立図書館の司書へと所属変更させられたのち、彼は教育と研究の場からしばらく離れていた。実際、約20年にわたって、彼の研究業績は空白となっている。その理由や背景ははまだ明らかになっていない。いずれにしても彼が公の場で研究報告などを再開したのは、離散家族再会を果たした1988年のことであった¹⁵。

そうしてトロントの家族と手紙のやりとりをしながら、彼は徐々に過去の記憶を想起しはじめた。1993年、彼は妻に宛てた書簡のなかでこう書いている。「最近の言語学という深層構造やら表層構造やらいうものが、私の胸のなかにもあるようです。心の深層構造のなかに深く埋めておいてあった心情をひとり反芻しながら、過ぎし日々をたどるときが時おりあります。」¹⁶ここでいう「深層構造」「表層構造」が、米国の言語学者ノーム・チョムスキーの生成文法論に由来する用語であることはいうまでもない¹⁷。ここで彼は、はっきりと表にはあらわれないながらも、常に言動を意味づけてきた過去の記憶を「深層構造」と呼んでいるのであろう。しかし、それはまだテキストとして「生成」されることはなかった。

同年7月、朝鮮戦争が停戦合意にいたって40年を祝し、平壤では全国老兵

¹⁴ 金惠英・金泰成、前掲文、21頁。

¹⁵ 板垣竜太・コヨンジン前掲書の巻末に掲げた文献を参照。

¹⁶ 1993年3月21日付、金壽卿→李南載書簡。

¹⁷ Noam Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*, The M.I.T. Press, 1965.

大会が盛大に開催された¹⁸。金壽卿もこの行事に参席したのだが、その折に周りの人から勧められて、朝鮮戦争の回顧録を書くことにしたという¹⁹。1993年8月15日から書きはじめ、1994年11月20日に清書が完了した [7]。タイトルは「リュックのなかの手帖を開いて」と付けた。清書が終わって間もなく金壽卿はトロントに手紙を書き、この事実を李南載に報告した。「もしあなたがこれを読む機会があったならば、ところどころで涙を流すでしょう。そのときどきに家族のことを恋しく思っていた私の思いも反映されていますから。」²⁰

しかし、この回顧録がすぐにトロントの家族に渡ることにはなかった。そうこうしているうちに1995年7月、金壽卿が脳卒中をわずらった。一命は取りとめたものの、その後体が麻痺するなど、徐々に健康が悪化していった。1996年7月、トロント在住の長男の金泰正^{キムテジョン}が平壤を初訪問し、父と再会した。その際に、彼はこの回顧録を渡された。それは、金壽卿が書いた原稿そのものではなく、彼の平壤の家族がそれを筆写したものであった。その際には、メイン・タイトルが「ただ一心党に従って南北七千里」となり、元のタイトルであった「リュックのなかの手帖を開いて」は丸括弧のなかに入れられて格下げされていた。北朝鮮の出版物にはよくあるようなタイトルに変更されたわけだが、それがどのような理由によるものかは不明である。出版する計画があったのかもしれないし、検閲を受けても問題のないような表現に変えたのかもしれない。

こうして金壽卿の回顧録がトロントの家族らのもとに届いたのである。

¹⁸ 『로동신문』 1993年7月23～26日にその様子が報道されている。

¹⁹ 1994年11月27日付、金壽卿→李南載書簡。

²⁰ 同上書簡。

2. 手記に刻まれた戦場

この回顧録は、ほぼ時系列で並べられた45章で構成されている。最初の2章が序章に相当し、残り43章が1950年6月の戦争勃発から1951年3月の平壤帰還までの記録となっている。43章は5部に分けられ、各部・章にタイトルが付けられている。附録1には、もともとリュックのなかに持ち歩いていた「日記」を書き写したものが掲載されている（本稿末尾の「資料」を参照）。附録2としては、平壤を出発した1950年8月から8ヶ月間に歩いた道程をプロットした手書きの地図4枚が付されている。その全体にページ番号が1から173までふられている。金壽卿の記述にもとづいて、彼が通過した主要な地名を再構成したものが表1である。

私は附録1の地名を、1945年以前に製作された5万分の1地図や、韓国で製作された新旧地名が漢字表記された北朝鮮地図と照合し²¹、それをGoogle Earth上の地点に落とし込む作業をおこなった。その結果、地名の不明な一部の地点を除いては、金壽卿の道程を復元することが可能であり、またその記録が正確であることを確認できた。彼は南に派遣される直前、平壤市付近の道端で偶然遠い親戚に会い、記念品ということで『13道別携帯用朝鮮地図帳』を1冊もらっていた。1ページに1道ずつ印刷し、折って製本したものだが、洋服のポケットに入れて持ち歩けるようになっていた[116]。おそらく地名が比較的正確なのはそのためであろう。

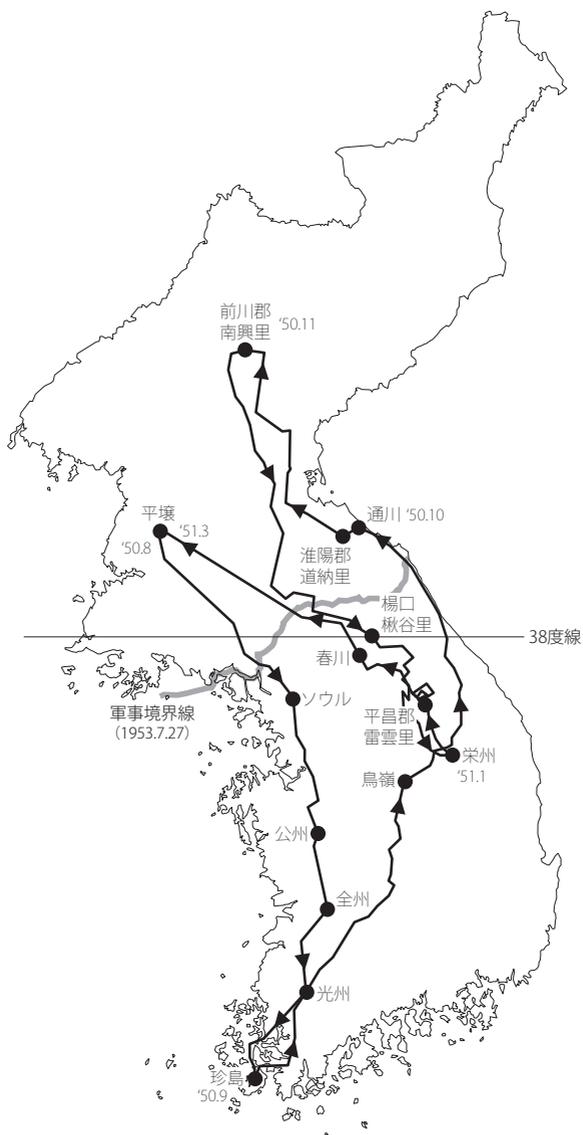
ただ、173頁にわたる詳細で具体的な手記の内容を、ここで全て紹介することは不可能である。ここでは、まず彼による5部構成にしたがってその道程の概要をトレースしておこう。

²¹『朝鮮半島五万分の一地図集成』陸地測量部作製、学生社復刻版、1981年。『最新北韓地圖』佑晋地圖文化社、1991。

表1 朝鮮戦争下の金壽卿の足取り

I. 第1次南進過程 (1950. 8. 9～9. 28)		
1950	8	平壤(8. 9)→新幕(8. 11-14)～[8. 16]～開城～ソウル(8. 20-22)～水原～全州(8. 28-30)。
	9	光州(9. 1)～珍島(9. 4-21)～光州(9. 25-28)
II. 一時的後退過程 (1950. 9. 28～10. 31)		
1950	9	光州(9. 28発)～潭陽～淳昌～鎮安～長水(9. 30)
	10	長水(10. 1発)～永同～尚州～聞慶 烏嶺(10. 9)～丹陽～寧越～平昌～[10. 25]～通川(10. 29-30)～淮陽郡 道納里(10. 30-11. 1)
III. 朝鮮人民軍に入隊して (1950. 11. 1～11. 28)		
1950	11	道納里(11. 1発)～高原～定平～永興～寧遠～長津～前川郡 南興里(11. 15-28)
IV. 第2次南進過程 (1950. 11. 28～1951. 2. 17)		
1950	12	南興里(11. 28発)～寧遠～永興～高原～文川～平康～金化～華川(12. 20)～楊口～[12. 22]～春川～洪川(12. 26-1. 1)
1951	1	横城(1. 1発)～寧越～丹陽～榮州(1. 17-18)～丹陽～寧越～平昌～柳浦里 師団政治部宿营地(1. 31-2. 2)
	2	師団政治部宿营地(2. 2発)～平昌～横城～平昌 雷雲里(2. 16-18)
V. 朝鮮人民軍を除隊して (1951. 2. 18～3. 3)		
1951	2	雷雲里(2. 18発)～横城～洪川～春川(2. 26-28)
	3	春川(2. 28)→[]→華川→鉄原→平壤(3. 3着)

(備考) I～Vの見出しは金壽卿による。～は徒歩、→は鉄道または車での移動を意味する。38度線を越えた部分には [] を挿入し、日付が分かる場合には書き込んだ。



金壽卿の朝鮮戦争路程（1950. 8. 9～1951. 3. 3）

(1) 南へ

1950年6月28日、「ソウル解放」の報道を受け、金日成綜合大学の学生らは蹶起大会を開いて、次々に人民軍へと入隊を志願していった²²。しかし教員はすぐに動員されたわけではなかった。朝鮮戦争前から、夏休み期間に全国の大学教員講習会が開催されていた。その慣例にしたがって、この年も7月1日から大学教員講習会が平壤駅前にあった平壤工業大学（朝鮮戦争中に戦士した^{キムチンク}金策の名を取って1951年には金策工業大学と改称）の庁舎ではじめられた。ところが講習初日から米軍らしき航空機による爆撃があり、大学キャンパスにも何発かの爆弾が落とされた。そこで、翌日から、大学教員は汽車に乗って平壤北部の順安邑^{スナンウプ}に場所を移し、そこの中学校の校舎を借りて予定されていた講習を終えた [9]。

手記によれば、この講習会参加者の「嘆願」により、党中央委員会は、大学教員を南半部の解放地域の党、政権機関事業に参加させることを決定した。順安に集結した大学教員らは、約1週間の政治講習を受けたのち、党中央委員会名義の南半部派遣信任状を受け取った [10]。そのなかには金大の教員が92名も含まれており、かれらは「新たに解放された南半部の人民に、北半部でなしとげられた輝かしい成果を伝え、朝鮮民主主義人民共和国の旗幟の下で祖国統一の道を教える」という目的のもとに、南派（南への派遣）されることになった²³。

朝鮮戦争の開戦後、南朝鮮の占領地域に北朝鮮がまずおこなったのが党および社会団体の組織化ないし復旧であった。しかし党員を拡充しようと思っても、それ以前の思想的弾圧もあいまって、まず人材が不足していた。そこで各地で幹部や党員らのための政治講習がおこなわれていた²⁴。大学

²² 前掲『김일성종합대학 10년사』73쪽.

²³ 前掲『김일성종합대학 10년사』74쪽.

²⁴ 권영진「북한의 남한 점령정책」『역사비평』7, 1989. 5, 80~82쪽.

教員が派遣される直前の8月1日には、文化宣伝省が「南半部各道（ソウル市）文化宣伝事業規程」を作成し、各地で法令・決定・支持などの諸施策、政治情勢などを宣伝、解説する方針を定めていた²⁵。これが大学教員らの派遣に直接関連しているかは不明だが、後述する金壽卿の講習会の内容とも合致している。

1950年8月9日、金壽卿は、他の大学教員らとともに平壤の^{テドンガン}大同江駅を汽車で出発した。その直前、彼は平壤近郊の農家の前を流れる小川の水で子どもたちと沐浴し、家を出た。1980年代に彼は、子どもらに宛てた手紙で、この離別が「こんなにも長い離別のはじまりになろうとは、どうして知り得ただろうか」と書いていた²⁶。彼からすれば、家を出るときには、これが家族離散のはじまりになるとは予想だにしていなかったのである。実際、ほとんどの大学教員が軽い夏服に着替えの下着を入れたリュックを背負う程度のいでたちであった [10]。当時、人民軍は破竹の勢いで朝鮮半島の南側の占領を拡大していたし、中国大陸では国共内戦の末に前年に中華人民共和国が成立してもいたので、かれらからすれば南が「解放」されるのにさほど時間がかからないと見込んでいたのではないかと思われる。

本来の予定では、汽車は京義線を南下して、一晩でソウル駅まで到着し、そこで派遣先の指示を受けたのち、8月15日の解放5周年に合わせて各地で記念行事を組織することになっていた。ところが、夜が明けても、汽車は平壤から30kmほど南に行った地点、^{ファンジュ}黄海北道の^{フッキョ}黄州に位置する黒橋駅で止まっていた。状態のよい機関車が軍用列車に動員されていた結果として、かれらが乗った汽車は古い機関車に多くの客車をつないだ間に合わせの編

²⁵ 朴明林、森善宣監訳『戦争と平和：朝鮮半島1950』社会評論社、2009年、176～191頁。文書は、문화선전성「남반부 각도 (서울시) 문화선전 사업 규정」1950. 8. (NARA, RG242, 190/16/25/3/E.299/Box895)。

²⁶ 1986年1月15日付、金壽卿→惠慈・泰正・惠英・泰成書簡。

成であったため、峠道をうまく越えられず、そうこうしているうちに日が昇ってしまったというわけであった。この辺りの手記の記述もまだ少しのんびりとしている。列車が止まってしまったので、かれらは、駅前で売っていた名物の黒橋白飴フツキョヒンヨツを買って食べたり²⁷、川に行って水浴びや洗濯をしたりなど、丸一日の自由休息をとった。

夜になり、また列車は動き出したが、今度も新幕駅シンマク（今の瑞興駅）にまで行って止まってしまった。そこに米軍の航空機が機銃掃射をおこなったため、機関車とともに、政治解説文や講演要綱のような政治教材を積んだ貨車も燃えてしまった。新幕から38度線まではまだ80kmあるし、そこからソウル市内まではさらに60kmほどの距離があった。隊列の責任者がこの状況を党中央委員会に電話で報告したところ、徒歩でソウルに向かうようにとの指示が下された [11]。

一行がソウルに着いたのは8月20日のことであった。金壽卿はまず恵化洞にあった家に住んでいた兄、金福卿キムボッキョンを訪ねた。彼は「こうやって来ると思って待っていた」と言って、家に弟を迎え入れた。金壽卿は、兄の家族らと2晩に渡って積もる話を語り合った [14-15]。その会話の中身までは手記に記されていない²⁸。

ソウル到着の翌日、金壽卿は当時東崇洞トスンに位置していたソウル大学校に向かった。人民軍占領下のソウルでは、ソウル大本部庁舎に教育省が置か

²⁷ 黄州の飴（饅）は既に1930年代には名物として知られ、各地で売られていた（『東亜日報』1938年11月3日）。

²⁸ 金福卿の長女金妍植さん（1939年生まれ、ロス・アンジェルズ在住）に、2016年9月14日と18日、インタビューすることができた。金妍植さんの家族が、戦争勃発後すぐに避難できなかったのは、母（金福卿の妻）がそのとき妊娠でご飯も食べられないような状態にあったからだったという。1950年8月に三寸が短期間ソウル恵化洞の家に来たときのことは、それほど記憶になかった。来たことは覚えているが、泊まって行った覚えはない、父と何か話したのかもわからないが、だとしても子どもが寝静まってからだったかもしれない、とのことであった。

れていたのである。そこで金壽卿は、他の金日成大の語文学部朝鮮語学講座教員たちとともに全羅南道^{チョルナムド}で事業をおこなうことを指示された [15]。彼は、2泊3日のソウル滞在期間中、兄とその家族以外には誰にも会わなかった。戦争が終わればいつでも会えると思っていたからであった。

8月22日、金壽卿ら朝鮮語学講座教員は、全羅北道に派遣されることになった歴史学部教員らとともに、南に歩いて向かった。その途中でも、「有名な成歎^{ソンファン}チャメ〔マクワウリ〕を食べないわけにはいかない」[16]と、商店で瓜を買って食べたりなど、まだ何やら余裕のようなものが見受けられる。全州^{チョンジュ}で歴史学部教員と別れ、9月1日、全羅南道の道党本部の置かれた光州^{クワンジュ}に着いた。最初に道党本部に行ったときには、一晩休んで近くの和順郡^{フアスン}に配置すると告げられたので、金壽卿は近くでスイカでも食べてゆっくりしていた。

ところが間もなく宣伝部長から呼び出しがかかった。宣伝部長は、「南の海の方にある島である珍島が今朝解放されたという連絡があった。珍島郡党に行って働く人を派遣しなければならなくなった」と言うのであった。実際その前日の8月31日の早朝に人民軍が珍島に上陸し、ほとんど抵抗もなく、同日正午頃には珍島警察署に朝鮮民主主義人民共和国旗が掲げられた²⁹。その翌日に宣伝部要員の派遣要請が道党本部に届いたということであろう。金壽卿は、清津^{チョンジン}教員大学の文学講師と元山^{ウォンサン}教員大学の文理学部教員とともに、珍島に派遣されることになったのである [19-20]。

米軍製の軍用トラック、そして50トン級の発動機船に乗って、珍島の東岸、鹿津^{ノクチン}に着いたのは9月3日の未明のことであった。そこから珍島邑に向かい、以前地主が住んでいたという家³⁰に設けられた珍島郡党庁舎に入った。

²⁹ 『珍島郡誌 上』 2007, 270～272 等。

³⁰ 珍島を長年研究してきた伊藤亞人氏によれば、これは韓平教^{ハンビョンギョ}という地主の旧家であろうとのことである。

大学教員3名は郡党宣伝部講師として任命され、宿所兼事務室として部屋2間のある家屋があてがわれた。その後は、既に述べたとおり、審査を受けて党員または候補党員として登録された人々に対し、1度に50名ずつ5日間の政治講習をおこなった。講義内容は、「国際情勢をはじめ共和国憲法の本質、北朝鮮民主改革の成果、祖国解放戦争の性格など」であったという [23]。

米軍を主力とする国連軍が仁川上陸作戦を開始したのは1950年9月15日である。そこから形勢が一举に逆転し、人民軍は中朝国境付近まで一時追いつめられることになる。しかし珍島は電話もラジオも通じず新聞も届かず、通信から途絶されていたこともあって、金壽卿らにはそのような情勢を知るよしもなかった。彼が戦局の逆転を知るのは、北に向かって後退していた途中、9月末のことであった [30]。

9月20日、とつぜん光州の道党から連絡があり、金壽卿は光州の市党に召還されることになった [24]。道党宣伝部にいた金日成大教員が、手元の名簿中に彼の名を発見し、なぜか不安に思っ、道党幹部に異動を要請した結果だった [25] (本稿2-2も参照)。このときもまだ危機感のようなものは見いだせない。光州に着いた翌日の9月26日が、ちょうど秋夕チュソク (中秋) の日にあたり、金日成大の教員・学生とささやかな祝杯をあげたぐらいであった。

事態が急転したのはその2日後のことであった。道党委員長から呼び出しがあったので金壽卿らが行くと、慌ただしい雰囲気「平壤から来たトンム [「同志」の同輩・目下向けの表現] は早く北へ帰るように」とだけ指示された。事情を聞く余裕もなく、かれらは状況も知らないまま、他の党関係者とともに徒歩で北へ向かったのであった [27]。

(2) 自力で北へ後退する

かれらは、潭陽タミヤンから淳昌スンチャンへと行く途中に会った義勇軍の負傷兵 (南原ナムワオン)

出身) から話を聞いて初めて戦局のことを知った。また、間もなく米軍の戦車が近くに迫っていること、大きな道を行けないことも分かった。そこで一行は、まっすぐ平野部の大きな道を北上するのではなく、国連軍や韓国軍を避け、北東に向かって山間部の小道を抜けて行くことになった [30]。とはいえ、寝る場所や食糧を確保するためには時おり民家に立ち寄ることは必要だった。ある農家で、北朝鮮支持者の強い「民主部落」^{ミンジュブラッ}と南朝鮮支持者の多い「反動部落」^{バンドンブラッ}があるという話を聞いてからは、かれらは「民主部落」を渡り歩きながら進んで行くことになった [34]。

金壽卿らは、夜間に戦車と戦車のあいだをすり抜けたたり、真っ暗闇のなか京釜線を走って横切ったり、食糧もないまま険しい^{ムンギョソ}間慶峠を上り下りしたり、丸太の一本橋から川に墜落しかけたりしながら、徐々に北上していった。後退途中の金壽卿は、38度線さえ越えれば北朝鮮にたどり着くと考えていた。「後退」というのは南に派遣された人たちがやるものであって、38度線の向こうには以前のような北朝鮮社会があると想像して歩みを進めていたのである。ところが、東海岸の襄陽^{ヤンヤン}で38度線を越えたとき、そこが既に南朝鮮の延長に過ぎなかったことに彼ははじめて気づいた [53]。

彼はそこからさらに北上した。もう少し行けば、故郷の通川^{トンチヨン}だったからである。金壽卿の従兄(父の弟の息子=金富卿^{キムフギョソ})がまだ住んでいるだろうから、そこに行けば冬服や靴などをもらえるかもしれないと彼は思ったのである。しかし、通川にたどり着いた彼が故郷の村で見た光景は次のようなものであった [61-62]。

故郷の村に辿り着くと、駅前商店街は破壊し尽くされ、道の上には電柱が倒れ、電線が四方に散らばってぐちゃぐちゃに絡まっていた。人っ子ひとり目につかない静まりかえった通りで、どこからか何かが焼け焦げる臭いだけが漂ってくる。落ちてくる照明弾が辺りをばあつと照らし出すと、これはまさにベルギーの作家ローデンバックが名づ

けて描写した《死の都》に他ならなかった³¹。

私は悲痛に暮れた。胸が張り裂けそうだった。苦難に満ちた後退の日々も、東海岸にさしかかり、この道を北に行きさえすればもうすぐ私の最も愛する故郷の村、通川旧邑に辿り着くだろう、久しぶりに訪ねる故郷の地で従兄の家族をはじめとした親戚たちと会って、冬の準備でも少ししてから行こう——そんなふうに思って期待をふくらませていたのに、これほど無残にも破壊され焼かれた故郷の村を見ることになり〔以下略〕

従兄の家は、夕食をとった形跡はあったものの、もぬけの殻だった。あとから金壽卿が知ったところによれば、海岸にあった通川邑は、夜になると海から米軍側の艦砲射撃があったため、住民はその時間帯になると山の方に行き明け方戻って来るという日々を送っていた。ちょうど、すれ違いになったというわけである。金壽卿は、仕方なく、冬服の代わりに毛布をもらい、「党中央委員会の指示で南半部に行ったあと、今度は人民軍にしたがって北に後退する途中にここに立ち寄って行きます。毛布を1枚持っていきます。10月29日晚、壽卿」という置き手紙をして立ち去った。しかし、従兄の一家はその後南へと避難したため、この手紙もその後宙に浮いてしまうことになった。

あらゆる望みが絶たれた金壽卿は、とにかく北朝鮮側の支配地域に向かうことを最優先に再び歩きはじめた。険しい山道を抜け、10月31日に淮陽^{フエヤン}の道納里^{トナムニ}にまで行ったとき、人民軍に遭遇したのであった〔67〕。

³¹ 通川の光景を Georges R. C. Rodenbach の『死都ブルージュ (Bruges-la-morte)』に重ね合わせる印象は、朝鮮戦争当時から金壽卿が強烈に抱いていたようで、娘・金惠英との再開でもこの比喩を用いて当時のことを語っていたという（金惠英・金泰成、前掲文、21頁）。

(3) 人民軍とともに北上

一行に声をかけた第2師団の政治部長は、金壽卿ら金日成大の教員・学生らに宣伝要員としての入隊を勧めた。「われわれ2師部隊は洛東江^{ナクトンガン}まで進出したが、多くの犠牲者が出たので、部隊の力量が弱くなっており、特に政治活動家が不足している。あなた方は偉大な首領金日成將軍のお名前を抱いた大学の教員、学生たちなのだから、われわれとしても信頼できる。わが部隊に入って政治活動家として働く考えはないか」というのであった。金壽卿は相談のうえ、この要請に応じ、2師4連隊1大隊の宣伝員に任命された [68]。

11月1日、部隊はさらに北へ向かって後退を続けた。平壤まで流れる大同江の源流のそばをさかのぼり、寒泰嶺^{ハンテリョン}の源泉で松の根からしたたる水滴をすくって飲んだりもした [74]。その間に朝鮮戦争はまた次の戦局を迎えていた。「抗美援朝」を掲げて密かに入朝していた中国人民志願軍が、10月25日から戦闘を開始し、国連軍を退却させはじめていたのである。金壽卿の所属する部隊が咸境南道^{チャンジン}の長津にまで北上して来ると、中国の志願軍を歓迎する貼り紙が既にあちこちに貼られていた。「開水」〔中国語で湯〕と表示された所では、熱い湯を沸かして、通りゆく軍隊にふるまっているのが見えた。そして11月15日、金壽卿らの第2師団の部隊は、中国軍が既に宿営していた前川^{チョンチョン ナムフンニ}の南興里に腰を落ち着けた。というより、数多くの部隊が次々に後退してきて各地に宿営していたため、最も遅くやってきた2師部隊はそれ以上北上できず、そこで次の指示を待つことになったのであった [75]。

その指示は間もなく届いた。手記によれば、11月25日、朝鮮人民軍総参謀長³²が南興里を訪れ、金日成最高司令官の新たな命令を伝えた。それは、

³² 手記には朝鮮人民軍総参謀長とだけあって、名前は書かれていない。この頃は延安派の金^{キム}雄^{ウン}が総参謀長だったと考えられる。

チュエヒョン
崔賢を第2軍団長〔軍団は師団の上の単位〕とし、踵を返して再び南に向かい、「敵後方」（すなわち国連軍側の占領地）に入り込んで遊撃戦を展開し、第二戦線を形成するというものであった〔77-78〕。これは、米軍の反撃に対抗して中国志願軍が11月25日から開始した「第二次戦役」の一環（東部戦線）と考えられる。この第二次戦役は中国志願軍が主力であったが、そこに朝鮮人民軍の第1・第2・第5軍団などが合流していたことが、中国側の記録を通じて知られている³³。中国志願軍側は、既に11月13日の会議で、朝鮮人民軍第2および第5軍団所属の11個師団^{チュオルウォン}・3個旅団を、鉄原南北の広大な地域でゲリラ活動させる方針を定めていた³⁴。こうした点からして、「第二戦線」という二重戦線構築戦術は、毛沢東の人民戦争の特徴であり、朝鮮人民軍発というよりも中国人民志願軍側から出てきた作戦だという研究もある³⁵。

ともあれ、「敵後方」というのは、言うまでもなく戦線をくぐり抜けなければ入り込めないものであり、その先でさらにゲリラ戦を展開するというのだから、その任務はかなり危険なものであった。しかも、それに見合った客観的条件も整っているとはいえない状況であった。部隊には、中国から届いた綿入りの服と軍帽、チェコから届いた編み上げ靴^{モックドゥック}が各自に配付されてはいたものの、小銃などの武器は全く不足していた。その問題については、戦闘によって米軍から武器を鹵獲せよとの指令が出ているのみだっ

³³ 和田春樹『朝鮮戦争』岩波書店、1995年、191～195頁。なお、この第二次戦役で12月6日に平壤が中朝軍により解放されたことを受け、12月7日には中国人民志願軍と朝鮮人民軍の連合司令部が組織され、その最高司令官に彭徳懐がついた。

³⁴ 홍학지 (洪学智), 김창호・백상호 역『항미원조전쟁을 회억하여』동북조선민족교육출판사, 1998, 102쪽.

³⁵ 朴明林, 前掲書, 522～523頁。なお、後の北朝鮮の公式記録によれば、11月17日に第2軍団長に対して「敵後方闘争を強化することについて」という指示を与えたことになっている（김일성「적후투쟁을 강화하는데 대하여：조선인민군 제2군단장에게 준 지시」『김일성 저작집 6 (1950.6-1951.12)』조선로동당출판사, 1980)。

た [76-77]。そうした危険なミッションであったため、この作戦遂行にあたり、大学教員や民間人は、各自本来の場に戻ることになっていた。しかし、師団の政治部長は金壽卿に引き続き従軍するよう求めた。すなわち、「先生だけはわれわれの部隊と行動を共にしなければならない」、なぜならこの作戦では「外国軍隊と直接戦闘をすることになるだろうし、その時にはやはり外国語ができる人がわれわれの部隊にいないといけない」と言うのであった。そのときの彼の戸惑いたるや、想像に余りある。実際、手記からは彼が相当悩んだ様子が見て取れる。しかし、彼は結局これを応諾した。この辺の記述については、次節で検討しよう。

こうして彼は再び南へと向かうことになった。

(4) 再び南へ

部隊は11月28日から南進をはじめたが、小銃を持っていた1、2の小隊を除いては、全くの徒手部隊による南下だった [92]。政治部の金壽卿にまで米国製の小銃が渡ったのは年が明けた後のことだったが、結局最後までこの銃を撃つことはなかった [114]。

この南進は相当危険な道だった。前線に近づくにつれ、米軍の飛行機の偵察と行軍を避けるため、夜間に行軍した。昼間に休息をとる際にも、なるべく村に入らずに、付近の山の茂みに入って、とうもろこしの殻や藁などを敷いて休息をとるのが原則となっていた。ところが、連日の行軍で消尽した部隊は、^{フワチョン}華川では農家に入って休むことにした。そのとき偵察機が飛んできた。しかし疲れ切ったかれらは体が動かず、避難せずに、そのままびったりと並んで寝ていた。そこに飛行機が再び飛んできて、機銃掃射をおこなった。金壽卿のすぐ隣で寝ていた人は、弾が当たって「アイクッ！」と叫んで死んでしまった。38度線まで来たのは、12月22日、^{ヤング}楊口郡の^{チュゴク}楸谷里(カレゴル)においてであった。中国人民志願軍と朝鮮人民軍が38度線を越えて、「第三次戦役」を開始したのは12月31日のことなので、そ

れよりも早い時期の越境である。その後、38度線を越えて着いた洪川^{ホンチョン}の魚論里^{オロン}では、部隊は当然韓国軍と遭遇した。銃撃戦をおこなっている戦闘部隊を背に、金壽卿ら政治部の成員は、銃弾の飛び交うなか山を登って待避した。さらに年が明け、横城^{フエンソン}でも、兵士が米軍の飛行機による機銃掃射を受けて即死した場面に、目の前で遭遇した。金壽卿は結果的に生き延びることができたものの、いつ弾が当たってもおかしくない状況にあったといえよう。

さまざまな危険をかいくぐりながら、最も南まで入り込んだのは1月17日に着いた慶尚北道^{キョンサンブクト}の榮州^{ヨンジュ}だった。しかしながら、そこで何をするということもなく、部隊は翌日にそこを離れた [122]。全体的にこの38度線以南での部隊の活動については、一部のみを除外しては記述が薄い。地名確認が難しかったのか、村の名前が不明のものや誤っているものも散見される。実際にただ動き回っただけでさほど戦闘行動が無かったのか、叙述を控えているだけなのかは定かではない。ともあれ、部隊はそこからまた北上し、平昌^{ピョンチャン}のあたりを動き回ることになった。

もともと金壽卿は通訳要員だったはずである。ただ、常にその仕事があったわけでもなかった。政治部要員として彼が任されていた業務の一つは、脱落しかけた兵士を説得して隊列に戻らせることであった。すなわち、彼は担当の連隊の最後尾につき、道に面した家を調査した。もし、そこに部隊の兵士が入り込んでいれば、金壽卿は、かれらが脱落しないように説得し鼓舞しながら進んだ [110]。

そのなかで唯一通訳について記述があるのは1月22日の部分である [122-125]。この日、部隊は寧越^{ヨンウオル}の戦闘において米兵13名と韓国人兵士1名を捕虜にした。尋問に際して韓国人兵士の通訳の質が悪いとのことで、金壽卿が師団長の通訳をすることになった。米兵とのやりとりは意外に同情的である。ある兵士は、職業をもつのも勉学を続けるのも難しく、「第2次世界大戦が終わったので、もう世界では戦争は起こらないだろうと考えて」軍

隊に入ったのだが、朝鮮戦争に送られてしまい、最初の戦闘で捕虜になってしまったと言っていた。また、人民軍の捕虜取扱規程にもとづき、兵士が略奪した腕時計や靴などを取り戻して返却したエピソードなども紹介している。

2月になっても部隊は平昌辺りをぐるぐると回っていた。そうしていたところ、2月16日、平昌の^{スエウルリ}雷雲里で、先に到着していた第2軍団指揮部と合流した。そのとき、軍団幹部を務めていた金日成大の歴史学部出身の若い兵士から思いがけないことを言われた。すなわち、だいぶ前に、金日成最高司令官が作家、芸術家、大学教授、大学生らは除隊して平壤に戻るよう指令を出していた³⁶。しかし第2師団の名簿に金壽卿の名前を見つけた。2師団の政治部長が最高司令官の方針を無視して金壽卿を手放さなかったのは正しくない。すぐに除隊手続を進めたい、というのであった [127-130]。

翌日、金壽卿はともに除隊することになった労働新聞社記者1名とともに崔賢軍団長と30分間面会した。崔賢は次のように言った。

本当に、人民軍というのは無知で…。何とわが金日成綜合大学の先生が、まだわが部隊のなかにいたとは…。最高司令官同志は大学の先生方、大学生、作家、芸術人を平壤に送るように命令を下されたのに、これは間違いなく何か新しい事業を構想しておられるということを意味している。それなのにわれわれはその命令をしっかりと執行できずにい

³⁶ この指令が何なのかははっきりしないが、後に出された金日成著作集によれば、1950年12月24日、作家、芸術家、科学者らの前で「わが芸術は戦争勝利を早めるために貢献しなければならぬ」という談話をおこなった（김일성「우리의 예술은 전쟁승리를 앞당기는데 이바지하여야 한다：작가, 예술인, 과학자들과 한 담화」前掲『김일성 저작집 6 (1950. 6-1951. 12)』所収)。作家や芸術家を主対象とした談話だが、大学教授に対しても「はやく落ち着いて、大学の校舎などを整え、教材や教具も準備し、大学生の源泉も調査掌握しなければなりません。特に足りない教員問題を解決するのに大きな力をそそがなければなりません」と述べた（231等）。

るといわけだ。昨日もある高級中学校の校長先生がわが部隊のなか
にいるのを知って、すぐに除隊手続きをした。おい、ちょっと
これを見てくれ。総合大学の先生が靴下も無しに裸足でいるじゃない
か！先生！本当にすまない。こんなふうに大学の先生を扱うなんて…。

崔賢は、2人に平壤に戻るために必要な「生活費」を現金で与えるとともに、
軍団後方部に軍服・軍靴の支給、軍用車の利用許可の便宜を与えるよう指
示した手紙を参謀長に書かせ、さらに中国人民志願軍向けにも自動車利用
願いを中国語で書かせた [130-136]。こうして金壽卿は正式に除隊するこ
とになった。

(5) 除隊して平壤へ戻る

2月18日、金壽卿は雷雲里を出発した。2人は歩いて第2軍団の運輸部
のある春川にたどり着いた。2月28日、金壽卿は他の軍人らとともに藁の敷
いた車に乗って前線を離れた。

3月3日午前5時、ついに金壽卿は平壤に到着した [142]。金日成綜合大学
の総長を兼任していた許憲が官舎として使っていた家に、大学関係者が集
まっているようだとの情報に接し、金壽卿はそこに向かった。しかし、そ
の家にも元の彼の家にも家族の姿はなかった。彼がようやく見つけたのは
叔母、すなわち母方の叔父にして金日成大教員だった李鍾植^{リジョンシク}の妻だった。
彼は彼女から家族南下の消息を聞いた。

叔母の話は次のようなものであった [146-147]。1950年10月、金日成大
教員の家族らは一斉に北へと避難しはじめた。国連軍の落下傘部隊が投入
されるなか、これ以上逃げ場はないと判断した彼女は重大な決意をした。
10月20日ころ、夫を探してソウルへと向かったのである。彼女がソウルに
到着すると、恵化洞に住んでいた金福卿（金壽卿の兄）とその家族が、ちよ
うど生活に困って家を手放して全羅北道の沃溝^{オック}へと疎開しようとしている

のに遭遇した。そこで彼女は、かれらについて地方で避難生活を送ることになった³⁷。叔母はソウルに残っていたところ、1951年1月4日に再びソウルが人民軍統治下に入ったため、平壤に戻ってきたのだという。

金壽卿の朝鮮戦争の回想は、家族と別れた彼が新たな決意をもって研究に再び打ち込みはじめたことをもって唐突に終わる。それは、3月に金日成綜合大学にたどり着くまでが戦場で記した日記の範囲であったからでもある。その意味でこの回顧録は、タイトルどおり「リュックのなかの手帖を開いて」、そこに記された無味乾燥な日付と地名の羅列を、記憶によって肉付けしたものだといえることができる。

3. 「個人的」なもの、「社会的」なもの

(1) 「個人的」な文体をめぐって

ここまで朝鮮戦争下の金壽卿の足取りについて述べてきた。このテキストをいわば過去の経験に関する客観的記録として検討してきたわけである。ただ、このテキストは金壽卿の把握している事実関係をただ淡々と記しただけのものではない。1で述べたように、これは家族に向けて語ったことばでもある。そうした側面に注目してあらためて読んでみると、この回顧録は、ごく稀に彼の感情や揺れる思いなどのいわば「個人的な」記述がなされた直後に、そうしたものを振り切って克服するような記述が挿入されるという叙述上の特徴をもっていることに気づく。たとえば、汽車が新幕駅で破壊されたとき、「多くの人々（私を含めて）が心の片隅で考えていたことは、〔…〕ただ平壤に帰って自分たちの仕事を続けると〔党中央委員会が〕言ってくれるかもしれない」と考えたという。しかし、党中央委員会から

³⁷ 金壽卿の妻らの越南、避難生活、南での定住、トロント移民の過程などについては、金恵英・金泰成前掲文に詳しい。

汽車が動かないなら徒歩で行けと指示され、遠い所に行くには何かに乗らなければならないという習慣化された考えを打ちのめされ、「我に返った」と記している [11-12]。そして再びより硬くて公的な文体に戻って、叙述が進められる。

こうした叙述の2つの側面の関係は、あたかも言語学者フェルディナン・ド・ソシュールのいう言語 (langage) の両面、すなわち集合的で体系的なラング (langue) と個々人の個別の発話であるパロール (parole) の関係のようでもある。ソシュールによれば、ラングは社会的 (social) であり本質的 (essentiel) であり「個人の外にある部分で、個人は独力ではそれを創り出すことも変更することもできない」ものである。それに対して、パロールは個人的 (individuel) であり、副次的 (accessoire) で偶有的 (accidentel) なものである³⁸。彼が手記のなかで時おり見せた「個人的」な思いは、その直後の「社会的」な記述によって、「副次的」で「偶有的」なものとして解消され、再び淡々と叙述が進められるのである。しかしながら、揺れをも含む「個人的」なものからは、あり得る未来として想像されたものをも含めた金壽卿の経験を垣間見ることができると考える。

私がここであえてソシュールの概念を持ち出すのは、その理論に金壽卿自身も通暁していたからである。金壽卿は、植民地下の京城帝国大学において、ソシュールの翻訳者であり西欧の言語学理論の随一の紹介者として知られた小林英夫の研究室に通い続け、その抜群の語学力によって、フランス語、ドイツ語、英語、イタリア語などで書かれた言語学の最新の潮流に接していた。彼は、1930年代から構造言語学や音韻論を貪欲に取り込みながら、新たな朝鮮語学を構築しようとしていた。1946年に北朝鮮に渡ったあとはソ連の言語学の理論を採り入れたが、構造言語学を全て捨て去っ

³⁸ ソシュール、小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店、1972年、26～27頁＝Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, Payot & Rivages, 1995, pp.30～32.

たわけでもなかった³⁹。

私たちは、どこか「理論」なるものを研究の「対象」から切り離して考えがちである。すなわち、研究の「対象」となる人たちは「理論」を知らないが、研究者である「私たち」は「理論」を知っている。私たちはどこか、そのような知の不均衡性を前提に、「上」から「かれら」を「分析」しているのではないか。しかし、金壽卿の場合は、まだ人文科学がソシユールのインパクトを受けて「言語論的転回」をはじめるずっと前から、構造主義の理論に深く入り込んでいた。「理論」と「対象」の区分はここにおいて不明瞭なものとなってくる。しかし、それは単に区分が不明瞭だということではなく、「理論」なるものを歴史から遊離したものとしてではなく、歴史的な脈絡のなかに埋め戻した結果であるといえる。

金壽卿自身の「理論」に関していえば、実は彼は「個人的」な文体で書かれたテキストに可能性を見いだした論文を、1960年代に書いたことがある。文体論は、ソシユールの弟子バイイも、京城帝大時代の事実上の「師匠」だった小林英夫も、さらにはスターリン論文後のソ連の言語学界における中心人物の1人だったヴィノグラードフも取り組んだ言語学の1分野であるが、金壽卿は1964年に北朝鮮ではじめて朝鮮語文体論を体系的な書籍にまとめた研究者として知られている⁴⁰。彼は、その唯一の文学論であった「作家の個性と言語」において、作家の「個性」とは何かについて考察

³⁹ この点については拙稿で詳述した（前掲「金壽卿の朝鮮語研究と日本」）。金壽卿が1945年以前に原典で読んだ言語学者として、Saussure, C. Bally, A. Sechehaye, J. Vendryes, V. Brøndal, E. Benveniste, W. v. Wartburg, E. Lerchなどが挙げられる。

⁴⁰ 金壽卿の『朝鮮語文体論』は、残念ながらまだ見つけられていない。1996年に金日成総合大学から出された朝鮮語学史の書籍では、『朝鮮語文体論』（金壽卿、高等教育図書出版社、1964）は、わが国ではじめて出版された文体論の著書である。この本は言語実践科学としての文体論の研究対象と研究領域を明確にせしめ、朝鮮語文体論の成立を認められるようにした」と評価している（김영환, 권승모 편『주체의 조선어연구 50년사』김일성종합대학 조선어문학부, 1996, 212쪽）。

した⁴¹。彼はまず公式文書や論説などで用いられる「機能的文体」と、文学作品などで作家らが利用する言語手段構成の個人的体系としての「個人的文体」を区分した。彼は、機能的文体と個人的文体を、全体と部分、一般と特殊、主と従の関係として把握してはしない。むしろ彼によれば、人間の活動のあらゆる分野が描写の対象となる文学作品に見られる個人的文体は、文語体も口語体も用いられるし、標準語から外れたことばさえも使用され得るという点において、「包括性」を有している。それに対して機能的文体は、特定の使用分野や目的にしたがったものである。彼は、この個人的文体にこそ言語の可能性を見いだす。書き手が「事物の細部にわたってその特性を把握できないとき、生活から出発するのではなく既にある表現を機械的に反復するとき、その語調が陳腐で無味乾燥なものになってしまう」と言う。「労働者や農民たち——平凡な人たちが語るとき、かれらは決して型にはまった口調で表現しない」のであって、「人民たちの生活と有機的連携を結び、かれらの生活のなかに深く入ったとき、はじめて言語においても個性が明確になり得る」。実際、フォーカスの絞られた特定主題に対して明晰に記している言語学論文と比べると、この回顧録は幅広い事物について多様な語彙を駆使して書いている。それが「個性的」であるかどうかはともかく、ここでは個人的な語りの方にむしろ「包括性」を読み込んだ彼の視点を重視したい。

言語という問題に取り組んだ人物のことばを読むこと——この作業は、どうしても自己言及的ともいえる要素を抱え込んでしまう。以下、このテキストの再帰性を念頭におきながら、朝鮮戦争と家族離散に関わる、彼の「個人的」な経験にもとづくことばを読み解く。そのうえで、朝鮮戦争下で書かれた「社会的」な言語学理論がどのように位置していたのかを検討する。

⁴¹ 김수경 「작가의 개성과 언어」 『문학연구』 1964. 9.

(2) 「副次的」で「偶有的」な…

戦時下を生きた人たちが、あらゆる情勢を客観的に把握しているという
ことはあり得ない。知り得た情報のなかから判断し、選択し、それに賭ける
のである。情報から隔絶された珍島において、戦局も知り得なかった金
壽卿たちは、ほんの一瞬だが違う「ソウル」を見ていた。9月20日に彼が
光州に召還されることになったときのことである。彼とともに働いていた
2人の大学教員は、「ついに戦争が終わったのは明らかだ」と断じ、「大学
がまたはじまることになったから、金トンム〔トンムは「～さん」といった意味〕
をソウル大教員として登用するために、まず光州に呼んだのではないか」
と推測した。そしてソウルに行ったら教育省に行って、自分らもソウルに
行けるよう働きかけてほしいと懇願した。1948年7月に制定された北朝鮮
の憲法第101条では「朝鮮民主主義人民共和国の首都はソウル市である」
と記していた。だから、戦争が終わればそこに最高学府が置かれると考え
たのである。金壽卿はこれを「過大な幻想」と記しているように、確かに
戦局からして全くあり得ない「幻想」であったが、一方で「かれらが解放
されたソウルで大学教員になればどんなによいかとは考えた」とその思
いに対して理解を寄せている [24-25]。

これが情勢の読めないなかでの夢想のようなものだとすれば、状況がはっ
きり見えていたなかでの選択肢に関する記述がある。それは、金壽卿が南
興里で、南部に再侵攻する部隊への従軍を要請された場面である。従軍に
応ずるか、断って大学の仕事に戻るかという二択が彼の前に提示された[80]。

そうだ。私たちは後退の道を進む途中、一時的に軍隊に入って行動を
ともにしただけだ。もう後退は終わったのだから、もともと軍隊にい
たわけではない私たちは、そのまま後退の道を進んで自分の機関のあ
る所に行けばよいのだ。〔…〕その瞬間、私は大学の仲間たちの顔が
思い浮かび、かれらが今どこにいるのか、とても懐かしく思えてきた。

また次の瞬間、私の家族が今どこにいるのかは大学の人たちに聞いたら分かるだろうが、私が部隊から離れてもう少し北の方に進んでいけば、そうした情報も知ることができるのではないか——そう思えてきた。しかしさらに次の瞬間、この厳しい情勢において部隊の幹部が心から要請してきたことを振り切ることができるのか？〔と疑問を覚えはじめた〕

仮にこのとき彼が従軍を断っても家族に再会できなかつただろうが、彼がこのようにあり得たかもしれない時間を想像し得る状況にあったことにはリアリティがある。しかし「厳しい情勢」の論理によって、そうした思いは埋められた。承諾した直後の様子を、彼は次のように書いている [81]。

私は宿所に帰る道で、夜空にきらきら光る星を眺めながら、大学で一緒に働いた教員や学生の顔が浮かび上がってくるのを感じた。そして母、妻、妹、子どもたちはみんな今どこでどうやってこの寒い冬を過ごしているのかと心配にもなった。しかし今晚私が政治部長同志の前で言ったこと、その決心は全く正しかった。私は少しも動揺しない。

さらに南に向けて出発した日が次男の1歳の誕生日だったことに気づき、次のように述べる [93]。

後退の過程で毎日山道を上り下りしながら、家族のことを思い出すときには、遅くとも泰成が1歳になる前には私が家族に再会できるだろうし、その子の誕生日を祝ってあげることができるのではないかと予想していたわけだが、現実はこのようになってしまった。それにしてもこの寒い冬の日、家族たちは今どこでどのように暮らしているだろうか、泰成が1歳をどのように迎えているだろうか考えると、た

ただ胸が詰まる思いだった。しかしあらゆることは戦争の勝利のために、祖国の統一独立のために捧げなければならないと再び心を構え、家族らへの思い、1歳になった泰成への思いはもうしないように決心し、黙々と南興里の尾根を降りて行った。

こうして、祖国のための戦争という大義名分の前に、家族への思いを断ち切ったという語りになっている。

しかし、再び38度線を南へと越えたのちにも、長女の誕生日を思い出した [111-112]。

1月6日の夜中2時には横城郡屯内面^{ヒョンチョン}玄川里に着き、全員村に降りずに山上で1日中休んだ。藁を敷いてその上に寝ていたとき、ふとその日がちょうど私の長女に恵慈の誕生日だということを思い出した。きょうで満7歳だ。昨年9月1日には人民学校に入れようとその準備もさせていたのだが、戦争のために学校にも行けなくなった。今はどこでどのように過ごしているのか、いや体を壊したりはせず無事にいるのか、などという考えが深まってきた。だが、そんなことをいくら考えてもどうしようもなかった。前の晩の夜間行軍の疲労のため、いつの間にか私は眠りに落ちた。

ここでは「社会的」な記述というよりは、眠りによって「個人的」な記述が中断されている。

その翌日、寧越^{ヨンウォル}のある村で休息しようと思った家において、金壽卿は床に散らばった写真を見て心を痛めた [112-113]。

その家に入った瞬間に私の胸を刺したのは、ある部屋に立てられている本棚からアルバムと写真が落ちて無秩序に散らばっていたことだっ

た。この家に住んでいた人たちが急に家を出て、どこかに避難することになり、写真をそのまま捨てて行ったのだろうか。それにしてもこの家族が貴重な記憶を込めて保管していた写真を残して行き、この家に突然入ってきた見慣れぬ人々である私たちの靴痕が写真の上に付くことになったわけで、この事実を知ったらこの家の住民はどれだけ胸を痛めるだろうか。

こう考えているうちに、ふと私の家のことを思い出した。わが家はどのようなだろうか。わが家のアルバムやさまざまな写真は、家族がちゃんと保管しているだろうか。あまりに急なことで持ってくることもできずに部屋の床に捨て置き、米軍と傀儡軍〔韓国軍〕の軍靴で踏みにじられているのではないか。そう考えると敵意の炎が燃えあがり、1日も早く南の地を解放して家へと帰らなければならないという決意を再び誓うのだった。

最後はやはり勇ましい語りに転換しているが、その直前のシーンは、彼の繊細な文学的感覚をよく示すものとなっている。

他にもこうした記述の事例は枚挙に暇無いが、最後に、ようやく平壤に戻ってきたのに、家族がいなくなっていたことを知ったときの心情を語る部分を引用しておこう [147-149]。

私が南半部に行っているあいだ、どの1日をとっても家族のことを思わない日は無かったし、家に帰ることができれば、家族をいっそう強く愛し、家族とともにこれまで以上におもしろく生きたいと心に決めていたのに、その家族はいま遠く南の方に行ってしまったとは、これは一体どうしたことか。[…]

一方、周辺のさまざまな人々の話を聞けば、米軍とその走狗のためにどれほど多くの人々が名状しがたい不幸を経験したことか。私が被っ

た不幸というのはせいぜい父母、兄弟、妻子と離ればなれになって、私がひとりぼっちになったということであって、これは他の人々の不幸に比べれば何でもないことではないか。

私はその後、私自身の胸の痛む経験は自らの胸の奥底にしまい込み、毎日毎日を明るく楽天的に生き、自分に与えられた仕事を、いっそう責任感をもって、いっそう熱を込めて、やりとげなければならぬという決意を誓い、また誓うのだった。

ここで彼は、他の人々の「不幸」と比較することによって、自らの「不幸」を相対化しようとしている。また、家族への思いを胸の奥底に封じ込み、ただ前を向いて研究と教育の事業に打ち込もうとする様子がうかがえる。40年後に妻に宛てた手紙で彼が「心の深層構造のなかに深く埋めておいてあった心情」と表現していたもの（1参照）は、まさにこれであろう。長いあいだ秘めていたそうした思いを所々に入れ込みながら書き上げたテキストが、この回顧録であった。そのことは、回顧録が第三者を読者にしたものであるというよりは、離散した家族に向けて書かれたものだということが物語っているように思う。

(3) 民族のラング

回顧録の最後に書かれているように、戦場から戻ってきた金壽卿は、一家離散という「個人的」な経験を心の「深層」へと押し込めながら、「与えられた仕事」、すなわち民族の言語理論を確立するのに尽力することになった。

スターリンの言語学論文は、発表から間もない1950年7月末付で、北朝鮮の労働新聞社の雑誌『勤労者』に翻訳掲載された⁴²。ただ、既に述べたとおり、

⁴² 이・쓰팔린 「언어학에 있어서의 맑스주의에 관하여」 『근로자』 14, 1950. 7, 62~87쪽.

それから間もなく学者たちは戦場へと動員されたため、すぐに対応することはできなかった。加えて、金壽卿が戦場から戻ってきたあとも、金日成総合大学は疎開を続けていた。1951年5月には中和から平安北道^{ピョンアンブクト}の定州^{チョンジュ}へ移転され、9月には亀城^{クソン}の郡内各地に分散移転され、1952年2月には平安南道^{ピョンアンナムド}の順川^{スンチョン}の人民軍部隊駐屯地跡に移転した。平壤に金日成大学の学部が少しずつ戻りはじめたのは1953年9月以降のことであり、大学校舎が完工したのは1954年9月のことであった⁴³。この間、1951年7月に、ソ連生まれの朝鮮人で当時は文化宣伝省次官の座にあった奇石福^{キソクボク}がスターリンの理論を紹介する論説を書いてはいるが、言語学の素養がある人物ではないため、その内容を十分に理解したものではなかった⁴⁴。

言語学者をはじめとした北朝鮮の研究者らがスターリン論文に正面から取り組み、成果が出はじめたのは、その発表から2年ほど経った頃のことであった。その中心にいた人物が金壽卿であった。彼が中心人物であったことは、同時代のソ連の言語学者マーズルも報告している⁴⁵。既に私はこのプロセスや内容について詳しく発表したことがあるので⁴⁶、大学がまだ平壤に戻ってきていない1952年の段階で発表された最も包括的な論文「言語学の諸問題に関する I.V. スターリンの労作と朝鮮言語学の課業」⁴⁷に焦点を絞り、本稿の論点に関係のある点のみ論ずるにとどめたい。

スターリンは、経済的な発展段階に対応して言語が変化するのではなく、基礎語彙の蓄積と文法構造はゆっくりとしか変化しないと論じた。だから

⁴³ 前掲『김일성종합대학 10년사』79~94쪽.

⁴⁴ 기석복 「쓰말린의 언어학에 대한 리론」 『인민』 1951년7호. 奇石福の経歴については、장학봉 의 『북조선을 만든 고려인 이야기』 (경인문화사, 2006, 23~33쪽) を見よ.

⁴⁵ Ю. Н. Мазур, “Корейская Народно-Демократическая Республика”, *Вопросы Языкознания*, 1952-3, p.121.

⁴⁶ 이타가키 류타 (板垣竜太)、前掲論文.

⁴⁷ 김수경 「언어학의 문제들에 관한 이. 웨. 쓰말린의 로작과 조선 언어학의 과업」 『언어학에 관한 이. 웨. 쓰말린의 로작 발표 2주년 기념 문헌집』 조씨문화협회, 1952.

こそ、スターリンは「言語がきわめてねばりづよく、強制的な同化に対して大きな抵抗力をもつ」と述べた⁴⁸。金壽卿はこの箇所を最も重要視し、ここに朝鮮語の「民族的自主性」(335頁)⁴⁹の土台を据えた。すなわち彼は、中国の漢字文化の支配、日本帝国主義者の強制的同化に対しても、朝鮮語は基礎語彙と文法構造を保持して生き延びたと述べた。さらに、その朝鮮語の「民族的自主性」を「今日の同化主義者、植民地主義者であり新たな戦争の放火者である米英帝国主義者」への戦いの根拠とみなした(337-338頁)。このように、彼はまさに「機能的文体」によって明晰にスターリン論文の位置づけを紹介し、そこから「民族的自主性」をキーワードに、朝鮮語学の今後の課題を引き出したのである。

ただ、金壽卿はラングとしての朝鮮語の同一性が既に成立している自明のものと考えていたわけではなかった。金壽卿は朝鮮戦争前の論文において、朝鮮民族が「まだ三千万同胞が完全に統一した言語、完全に統一した文字をもてないでいる」と論じていた⁵⁰。だからこそ、正書法の確立や文法書と辞書の編纂などの言語規範化が必要だと論じ、実際そうした事業に熱心に携わっていたのである。スターリン論文に関する論文においても、最後には一貫した正書法の確立を求めている(353-354頁)。そう考えれば、朝鮮語の「民族的自主性」もまた所与のものではなく、当為のものだったのである。

ここで重要なのは、このテキストが、何よりも自らの家族が離ればなれとなり、同胞どうしが殺し合う状況のなかで書かれていたことである。この論文の執筆環境からして、落ち着いた研究室からほど遠いものであった。マーズルは1952年の報告のなかで次のように記していた⁵¹。

⁴⁸ 田中克彦、前掲書、210頁。

⁴⁹ スターリンの用語では“natsional'noy samobytnosti”となっている。

⁵⁰ 김수경 「문법 편수의 기본 방향과 조선어 신 철자법」 『조선어연구』 1(8), 1949, 140쪽.

⁵¹ Мазур、前掲論文、121頁。引用に際しては、スミルノフ・パベル氏の助けを受けた。

野獣のような悪意に満ちた米国の空賊は大学に野蛮な空爆を与え、一時的に平壤を占領することができた際に、10万冊以上所蔵していた大学図書館を略奪し、実験室と教室を破壊し、その設備を盗み出し、無傷で残った研究棟を爆破した。大学は山地に隠れた。教授、講師、大学院生、学生は溪谷に行った。敵空軍の強盗的な空襲から身を覆ってくれる山峡や、小さい泥の民家には現在、教室、研究室、図書館、実験室、食堂、寮が位置している。都市と農村で働く者たちは、学生に米、紙、食器、履物、衣服を送っている。ソ連や中華人民共和国、ヨーロッパの人民民主主義の国々から科学実験室・研究室のための機械や設備、教科書が贈り物として送られている。

この引用で描写されているように、金壽卿が論文を執筆していた頃、金日成総合大学は平壤から40kmほど離れた順川の柏田^{ベクチョン}里の谷間にあり、教員や学生はそこからさらに5～10km離れた農村の家々に下宿して、副業として営農をおこないながら研究と学習を重ねていた⁵²。

このように金壽卿をとりまく当時の状況は、家族が離散し、大学の構成員も分散し、朝鮮半島は激しい争いによってずたずたに分断されているという有様であった。そうした難境にあって、「民族的自主性」は自明の存在とは決してなりえなかった。それは、朝鮮戦争という状況のなかで彼がそれに賭けるほかない未完のプロジェクトなのであった。

おわりに

以上の叙述を、あらためてまとめてみよう。1946年8月に半ズボンに登山帽という軽いいでたちで越北した金壽卿であったが、その4年後の1950

⁵² 前掲『김일성종합대학 10년사』김일성종합대학, 1956, 93～96쪽.

年8月に政治工作のために平壤から南部へ向けて出発した彼も、それがその後の人生にとって決定的ともいえる大きなインパクトを及ぼす経験のはじまりになるうとは、思ってもいない様子であった。国連軍の仁川上陸後に形成が逆転しているのも知らず、彼は珍島での政治講習事業を終え、9月下旬に光州に行ったときも、知り合いと秋夕の祝杯をあげているほどであった。彼が事態の深刻さに気づくのは、平壤に自力で帰還せよとの命令を受けてからであったと考えられる。それでもまだ38度線を北に越えれば、もうそれで安全だと考えてひたすら歩き続けたのだから、まだ状況は飲み込めていなかったのである。

東海岸にある故郷の通川が米軍の艦砲射撃でぼろぼろになっているのを見て、金壽卿は再び山道をこえて平壤へ向かおうとするが、そこで人民軍に出会って入隊することになった。彼は人民軍とともに北へと後退し、それ以上進めなくなった地点においていったん宿営した。本来であればそこで除隊となり大学に復帰するところだったが、彼の語学力が使えると見込んだ第2師団政治部長によって南進作戦に投入されることになった。そのときもまだ自らの家族が他の同僚の家族と一緒に金日成大の疎開先にいるだろうと思いついていた彼が、この指示を逡巡とともに受け止めていたことは手記からもはっきりと見て取れる。

南部での第二戦線構築作戦は非常に危険なものであり、軍団指揮部が中央指示によって知識人らを除隊させ平壤に戻す政策を実行していなかったら、金壽卿の身もどうなっていたか分からない。しかし、九死に一生を得て平壤に戻ってきた彼が知ったのは、家族がすれ違いで南に行ってしまったという衝撃的な事実であった。しかし彼は家族離散の悲しみを胸の奥底に封印し、与えられた言語学の事業、すなわちスターリン言語学論文の受容に打ち込むのであった。

これが手記の大まかな内容であるが、そこには数多くの知識人らの戦場での動きが記されているなど、資料的価値が高い。ただ、この回顧録自体

は金壽卿が主に家族に向けて書いたものである。そのため手記の節々に、家族に対する思いや個人的な逡巡などを垣間見ることができる。

この手記を、金壽卿の朝鮮戦争体験に関する別の文章と対照してみれば、その叙述上の特徴は明らかである。『長編実話 人生の絶頂』^{メップリ} (1996年)⁵³は、金壽卿が主人公として登場する小説である。作者は金日成綜合大学語文学部の教員も務める作家リ・ギュチュンである。彼は大学創立50周年 (1996年) に際して、かつての大学教員や学生らに取材して同書を書いた⁵⁴。同小説はかなりの頁数を割いて朝鮮戦争のときの金壽卿を描写しているが、その内容から判断して、おそらく作家が回顧録を参照しながら創作した作品だと考えられる。しかし、その中身は大胆に書き換えられている。朝鮮人民軍とともに南部に再侵入することを決意するくだりも、逡巡したような様子は全く記述されていない⁵⁵。病の床で刷り上がったばかりの本書の見本に目を通した金壽卿は、代筆によってトロントの妻に手紙を書いた。率直な感想のような言葉はみられないが、この本のことを「内容は、革命的信念と義理をかたく守りながら、偉大な首領に対する忠誠の心をもち、朝鮮語学の建設と発展のためにあらゆるものを捧げた私の姿を基本にすえて描写しています」と要約している⁵⁶。その彼の評価どおり、この小説は、まさに回顧録のなかの「副次的」で「偶有的」なものを切り捨ててできあがった国家の物語である。

それに対して、金壽卿がもっぱら家族に対してその離散の原点となった朝鮮戦争経験を語った回顧録の方は、そうした揺れやその都度の思い、さらには実際には泡のように消えてしまった未来への夢想までもを描き出す

⁵³ 리규춘 『장편실화 삶의 메부리』 금성청년출판사, 1996.

⁵⁴ これ以外に、金壽卿の京城帝大時代の同期生であり共に越北した歴史学者・金錫亨を主人公とした小説 (리규춘 『장편실화 신념과 인간』 금성청년종합출판사, 2001) もある。

⁵⁵ 前掲 『삶의 메부리』 124~125쪽.

⁵⁶ 1997年5月9日、金壽卿→李南載書簡。

ものであった。しかし、彼の回顧録は、そうした「個人的」な思いを表出するやいなや、すぐそれを「社会的」なものによって乗り越えるような叙述を繰り返していた。その点において回顧録は、結果的に、彼がスターリンの言語学論文を受けて書いた著作で力説した言語の「民族的自主性」という論点とも矛盾なく接続するテキストとなっている。といっても、私は、彼が言語学論文や回顧録を通じて表明した「民族」というものへの思いが偽りだとか、職業上割り切って書いているにすぎないなどと評価したいわけではない。暴力と憎悪によって民族が引き裂かれ、家族が離散し、一人北朝鮮に取り残された金壽卿にとって、ただ「全人民的」なものと思像された言語こそが、ばらばらになったものをつなぎ合わせてくれるとの思いを託すことができるリアルな存在だったことは、十分あり得る。そして、その思いは彼の生涯のなかでは決して達せられることがなかった。

（謝辞）貴重な資料を見せてくださった金壽卿のご遺族にまずは感謝したい。資料については、Lev R. Kontsevich、コヨンジン、鄭雅英のお世話になり、ロシア語の読解については Smirnov Pavel の助けを借りた（以上、敬称略）。この場で謝意を表したい。なお、本論文は、JSPS 科研費 JP16K02019 の成果である。

(資料) 《リュックのなかの手帖》に記録された《日記》

※回顧録の「附録1」より抜粋、翻訳。

1950. 8. 9. 平壤発。(大同江駅) [汽車]
8. 10. 黒橋駅着、発。
8. 11. 新幕着。
8. 12. //
8. 13. //
8. 14. 新幕発 [徒歩]
8. 15. 汗浦着、発。
8. 16. 開城着。
8. 17. //
8. 18. 開城発、長湍着。
8. 19. 長湍発、汶山着。
8. 20. 汶山発、ソウル着。

[略]

1950. 11. 28. 午後5時 南興里発。(泰成の満1歳誕生日) (2師4連隊政治部連隊長とともに)
11. 29. 午後3時 (甲峴嶺) 北洞鷹谷^{メッコル}着。
午後5時 鷹谷^{サンジツチャム}発。
午後11時 上地站着。

[略]

3. 1. 午前6時 華川郡上西面九雲里着。(惠英の誕生日)
午後7時 九雲里発。
3. 2. 午前6時 鉄原郡鉄原面栗梨里 (リョンダム) 着。
午後7時 栗梨里発。
3. 3. 午前5時 平壤着。
3. 11. 午後8時30分 中和郡南串面坪湖里着。(金日成綜合大学教員集結所)

参考文献

○未公刊資料

〈金壽卿遺族(トロント在住)保有〉

김수경 『오직 한마음 당을 따라 북남 7천리 / 배낭속의 수첩을 펼치며 / 한지식인의 조국해방전쟁참전수기 (1950. 8. 9~1951. 3. 3)』 1994.

金壽卿家族宛書簡 (1986~1999年)

〈米国立公文書館(NARA)所蔵〉

문화선전성 「남반부 각도 (서울시) 문화선전 사업 규정」 1950. 8. (NARA, RG242, 190/16/25/3/E.299/Box895)

○新聞

『東亜日報』、『로동신문』

○著書・論文

〈日本語文献〉

板垣竜太・コヨンジン編 『北に渡った言語学者金壽卿の再照明』 同志社コリア研究センター、2015年。

板垣竜太 「金壽卿の言語研究と日本：植民地、解放、越北」 板垣竜太・コヨンジン、同上書。

金惠英・金泰成、板垣竜太訳 「父、金壽卿」 板垣竜太・コヨンジン、同上書。

ソシュール、小林英夫訳 『一般言語学講義』 岩波書店、1972年。

田中克彦 『「スターリン言語学」精読』 岩波現代文庫、2000年。

朴明林、森善宣監訳 『戦争と平和：朝鮮半島1950』 社会評論社、2009年。

陸地測量部作製 『朝鮮半島五万分の一地図集成』 学生社復刻版、1981年。

和田春樹 『朝鮮戦争』 岩波書店、1995年。

〈朝鮮語文献〉

권영진 「북한의 남한 점령정책」 『역사비평』 7, 1989. 5.

기석복 「쓰말린의 언어학에 대한 리론」 『인민』 1951년 7호.

김귀옥 『이산 가족, '반공 전사'도 '빨갱이'도 아닌』 역사비평사, 2004.

김수경 「문법 편수의 기본 방향과 조선어 신 철자법」 『조선어연구』 1(8), 1949.

—— 「언어학의 문제들에 관한 이. 웨. 쓰말린의 로작과 조선 언어학의 과업」 『언어학에 관한 이. 웨. 쓰말린의 로작 발표 2주년 기념 문헌집』 조소문화협회, 1952.

—— 「작가의 개성과 언어」 『문학연구』 1964. 9.

- 김영환, 권승모 편 『주체의 조선어연구 50년사』 김일성종합대학 조선어문학부, 1996.
- 김일성 『김일성 저작집 6 (1950.6-1951.12)』 조선로동당출판사, 1980.
- 김일성종합대학 『김일성종합대학 10년사』 김일성종합대학, 1956.
- 리규춘 『장편실화 삶의 메부리』 금성청년출판사, 1996.
- 『장편실화 신념과 인간』 금성청년종합출판사, 2001.
- 이·쓰딸린 「언어학에 있어서의 맑스주의에 관하여」 『근로자』 14, 1950.7.
- 李泳澤 편집 『最新北韓地圖』 佑晋地圖文化社, 1991.
- 이타가키 류타 (板垣竜太) 「월북학자 김수경 언어학의 국제성과 민족성」 신주백 편 『한국 근현대 인문학의 제도화 : 1910~1959』 혜안, 2014.
- 장학봉 외 『북조선을 만든 고려인 이야기』 경인문화사, 2006.
- 진도군지편찬위원회 『珍島郡誌 上』 진도군지편찬위원회, 2007.
- 최경봉 「金壽卿의 국어학 연구와 그 의의」 『한국어학』 45, 2009.
- 홍학지 (洪学智), 김창호·백상호 역 『함미원조전쟁을 회억하여』 동북조선민족교육출판사, 1998.

〈歐文文献〉

- Chomsky, Noam, *Aspects of the Theory of Syntax*, The M.I.T. Press, 1965.
- Мазур, Ю. Н., “Корейская Народно-Демократическая Республика”, *Вопросы Языкознания*, 1952-3.
- Murra, John V. et al. eds. and trans., *The Soviet Linguistic Controversy*, New York: King's Crown Press, 1951.
- Saussure, Ferdinand de, *Cours de linguistique générale*, Payot & Rivages, 1995.